西ベルリンからの便り

長阪たか子

最近主のいなくなった母家の押し入れの片づけをしていたら、隅から、懐かしいというか少々面映ゆいというか、古ぼけた手紙の束が出てきました。はるか 30 年ほど前、家人の仕事の都合で、子どもたちと一緒に２年間札幌から当時の西ドイツの孤島、西ベルリンに移り住んでいた時、私が甲府の実家に当てたものでした。

誰しも経験することでしょうが、昔の手紙は時間は経っているのにもかかわらず、読み返せばつい最近のことのように思い出が鮮明によみがえるものです。

西ベルリンでの生活は、私にとって、初めての海外生活でした。当時の私にしてみたら、冒険でもありましたので、余計に新鮮にうつり、印象深かったものと思います。

その中から、２，３当時の西ベルリンでの様子をご紹介したいと思います。

生活編

＊12 月に入り、慌ただしい毎日をお送りのことと思います。

先日はおもち他、お正月用の食品を送ってくれてありがとうございました。こちらの日本食品店「とこたん」で小豆を買いましたので、お汁粉をつくるつもりです。やはり、ケーキとコーヒーでは、クリスマスは来ても、お正月の気分にはなれませんから、とても嬉しいです。また一緒に入っていた羊羹を 5 ミリぐらいの薄さに切って少しづついただきました。

周りの家々の窓を通して、立派なクリスマスツリーの飾り付けが見えます。

我が家でもマーケットで１メートルほどのクリスマスツリー(本物の樅の木)を買い、飾ってクリスマスを待っています。ミセス・ヨルク（階下に住んでいる大家さんの奥さん）によると、こちらではクリスマスツリーを飾るのは勿論のこと、4 週間前から、一週間ごとに太いキャンドルを 1 本づつ増やしながら、クリスマスのくるのを待つとか。

ここベルリンでも、若者を中心に、無神論者が増えているそうですが、この時期だけは神妙にクリスマスのくるのを待つようです。

ことば編

今日、日本人の友達の T さんが、一緒に近くのコミュニティーセンターへ、ドイツ語を習いにいかないかと誘ってくれました。成人学級のようなところで、

無料で地域に住む外国人にドイツ語を教えてくれるんだそうです。行きたいのはやまやまですが、M（次男５カ月）を連れて行くわけにはいかないので、残念ながら断わりました。今はＧ（長男４歳）が幼稚園で覚えてくるドイツ語を彼から教わったり？、ミセス・ヨルクに教わったり、自習したりしています。

でも先日、M が風邪で熱がでたので水枕を買ったつもりが、湯たんぽでした。いくらか言葉に自信がついてきたところへこの失敗でがっくりです。またまた、みんなにばかにされました。まったく言葉がわからないということは、自分が本当にばかで、惨めに思えます。

G も幼稚園に行き始めて間もなく、先生から、「G は幼稚園で一言もしゃべらないけれど、耳が聞こえないのではないか」と、いわれました。が、3 カ月たった今、ようやく言葉が出始め安心しております。

「僕を段ボールに入れて甲府へ送り返してよ」と泣きながら訴えられて途方にくれたこともありましたので、今は本当にほっとしております。

家の近くのベルリンの壁　（1977 年当時）
東ベルリンから、西へ脱走に失敗して亡くなった人々の記念碑が埋め込まれている

社会情勢編

＊先日は天皇（昭和天皇）即位 50 年記念を祝ったそうですね。ラジオを通じて知りました。（1976 年昭和 51 年）

壁に囲まれた西ベルリンに住んでみると、いかに日本が平和な国であるかがよくわかります。同じドイツ民族でも、西ドイツと東ドイツは、もう永久に統一はされないだろうというのが、こちらの人々の考えのようです。

「ただ一人かたくなに、『いずれ両ドイツが一つになる』と信じているのが、うちの奥さんだ」、と大家さんが笑っています。

西ベルリンはまだ、フランス、イギリス、アメリカの統治下にあって、地区も分かれてそれぞれの国の軍隊が駐留しています。私たちが住んでいる地区は、アメリカの統治地区ですので、アメリカの軍隊が、時々平和通りの倍くらい広い通りを派手にパレードをしているのに出くわします。本物の戦車の行列に子どもたちは興奮していました。こんな光景を見ていると、私もミセス・ヨルクの「いつか両ドイツが一つに」などということは、まだまだずっと先の夢のような話しに思えます。

先日、東ベルリンで一日遊びました。まず、チェックポイントチャーリーというジグザグのブロック壁で作られた検問所で、大勢の兵隊に囲まれて、車の

座席を外したり、車の底に鏡を差し込んでみたり、ちょっと怖い思いをしました。不審なものを持ち込まないかをチェックしたんだそうです。

街中では、ロシア兵が軍服のままデートしている姿があちこちで見られました。ヒトラー総統本部跡も今は草に覆われた小高い丘になっており、「夢の跡」といった風情です。戦前、華やかだったベルリンの、主だった建物は殆ど東ベルリンにあるそうです。一見立派な建物の壁には至るところに弾痕が見られ、崩れたガレキさえかたずけられず、そのままに放っておかれています。

人々は地味な感じですが、こちらが子ども連れなのでみな、微笑んでくれたり、一言二言声をかけてくれるのですが、言葉がわからずとても残念でした。言葉ってやっぱり大事ですね。

＊今から 22 年前（1989)、西と東を隔てていた壁が壊されて、東西ドイツは統一されました。興奮した人々がブランデンブルグ門に続く壁にのぼってハンマーで壊す場面や、固く閉ざされていた門の下を、大群衆が大声で何か叫びながら通り抜けているのをテレビで見た時、ミセス・ヨルクの「夢の話」が現実になったことに鳥肌がたったのを今でも思い出します。

ミセス・ヨルクからは、私たちがその後アメリカへ移り、また、日本へ帰国しても、以来ずっとクリスマスシーズンには、ドイツ語でびっしり書かれたカードが届きました。

5 年ほど前、再び当時の住まいを訪れる機会がありました。当時住んでいた家や周辺は 30 年以上経ても殆ど変わっていませんでしたが、残念なことにヨルク夫妻は、私が行く２年前に相次いで亡くなっていました。ミセス・ヨルクの「夢の話」について直接話すことができなかったことが何より心残りです。